

潟語り(三十)

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

ゴリ漁のこと

天王字休下の桜庭耕一さんは昭和八年生まれ。働き過ぎて四十代で体調を悪くした父親の手伝いで、小学校高等科の頃から一緒に漁に出ていたといいます。今回はゴリ漁についてお聞きしました。

網の中に入るものは、全部金になったもんだ

ゴリふき(曳き)の期間は八月から十二月頃まで。日が暮れる頃になれば江川から船を出したもんだ。もちろん当時はエンジンなどなし。手でこいで風のある時は帆を揚げてな。まつ暗なもんだがら、空の星を見て大体の船の位置を確認する。今でいう天測というやつだな。

麻で作ったロープの長さは百間。網を入れ、ロープを「ろくろ」にかけて巻き揚げたもんだ。疲れてねぶかき(居眠り)せば、巻きながら手を「ろくろ」にぶつけてしまつてな。日が上がるまで十回位は網を曳いたもんだ。

網を揚げれば、次は魚の選別。ゴリ、グンジ、エビなどが入ったもんだども、明りも何もねえ夜の船の上で選別したもんだよ。よく「暗闇の中で小魚を選別したもんだごと」って不思議がられるども、それは手の感触と慣れたな。人間っていうのは、長いこと暗闇の中にいれば、夜目がきくようになってくるもんだ。網が破れた時だつて船の上で直したもんだもの。

月は明る過ぎればだめ。魚はまなぐ(目)がいいから月の明るい夜は網に入らねもんだもの。だから満月になれば漁は休み

だった。

網は底を曳くもんだがら、「もぐ」もいっぺん入る。そのもぐだつて金になったもんだ。柔らつつけものは「ええずめもぐ」つていって、ええずめの下に敷く。固いもぐは「おどしもぐ」。「おどしもぐ」つていうのは、けつを拭くもぐのことよ。使い終わつたもぐは、その後には肥料にもなる。んだがら網を揚げれば、捨てるものは何もねえ。今でいう資源ゴミ、リサイクルつていうやつだな。このように、潟でとれるものは一応、何でも金になつたもんだよ。

朝、戻つてくれば魚をだしに入れ、自転車で佃煮屋まで運んで買つてもらう。一晩で十貫、二十貫もとれば大漁。そういう時は気分もいいもんだつたな。



江川漁港での船の出入り
仲手良き桜庭夫婦

奥さんのカチエさん

あの頃だば
いぐ働いた
もんだ...